

1932年ロサンゼルス・オリンピックの メディア表象[®]

浜田幸絵 (東京経済大学大学院)

1. はじめに

近年、オリンピックの政治的・社会的・文化的意味に着目する研究が盛んになっている。⁽¹⁾ こうした研究関心からすれば、一つの焦点になるのがメディアの果たす役割である。本稿は、これらの動向を踏まえて、日本における1932年ロサンゼルス(以下、ロス)・オリンピックの新聞報道の内容を、ナショナリズムの観点から明らかにしようとするものである。

1920年代半ば以降、日本社会ではメディアの大衆化が進行し、新聞・雑誌・書籍の発行部数が急増、ラジオ・ニュース映画といった新しいメディアが登場・普及した。こうしたメディアの大衆化と連動して、スポーツのメディア・イベント化も進んだ。1927年に始まったラジオのスポーツ中継は、大衆娯楽としてスポーツが人気を集めることに寄与した。また、新聞社が主催・後援することが多かった日本のスポーツ・イベントは、新聞社の寡占化・巨大化によって、より大規模かつ社会の広範な層を巻き込むものとなっていた。⁽²⁾

ロス大会が開催された1930年代初頭には、オリンピックという国際的なスポーツ・イベントをナショナルな規模で体験する社会的条件が整っていたといえる。これまでの研究では、1936年ベルリン・オリンピックが、軍国主義の風潮が顕著であった大会として注目されてきた。しかし、国際的なスポーツ・イベントにおけるナショナリズムを多層的なものとして捉えるならば、注目に値するのは、ロス大会であると考えられる。

だがロス大会に関する研究は十分になされているとは言い難い。ロス大会に関する先行研究としては、ラジオ放送に関するいくつかの研究があるほか、⁽³⁾ 筆者が、戦前日本の諸組織（新聞社・放送局・政府・企業）のオリンピックへの関与のあり方の変遷をたどり、同大会が国民的イベントとして展開した最初のオリンピックであったことを明らかにしている。⁽⁴⁾ しかし、メディアの報道内容に関しては、吉見俊哉が、1940年東京大会に関する論考で、ロス大会を契機としたオリンピック報道の論調の変化を指摘しているのにとどまってお⁽⁵⁾り、実証的分析は管見の限りない。

さて、本稿では、ナショナリズムの再生産に焦点を当てるが、ナショナリズムという概念は、一枚岩で捉えられるものではなく、近年のナショナリズム論では、政治的原理や思想を含んだ主張や運動のみならず、国民共同体を想像する認識の枠組みにまで広げた議論が展開されている。⁽⁶⁾ ナショナリズムを、構築主義の立場から国民共同体を想像する認識まで包含するものと拡大的に解釈すれば、マス・メディアの報道におけるナショナリズムの再生産に関する言説は、幾層にも重なっているといえる。また、あらゆる表象は多意味的 (polysemantic) であり、受け手の受容のあり方も多様でありうることを考慮すれば、遠い過去のイベントにおけるナショナリズムのあり方を一挙に論証することは、難しい。そこで本稿では、ナショナリズムの再生産に関するメディアの表象・言説のレベルに絞って、それがロス大会報道においてどのようなものであったかを明らかにすることを課題とする。具体的には、新聞の言語的・視覚的表象を、量的・質的に分析する。

これまでの研究では、満州事変以降、マス・メディアは、天皇と国家に献身する国民の物語を社会に充満させる過程で重要な役割を果たしたとされている。⁽⁷⁾ ただ、国際関係史の研究によれば、スポーツは1930年代においても政治から独立性を保ち、諸国間の友好促進の理念を追求した領域で、日本もスポーツにおける国際主義を尊重していた。⁽⁸⁾ 国家主義的風潮と国際性の追求がどのように絡み合っていたのかが、1930年代初頭の国際的なスポーツ・イベントの報道を考えるうえで重要であろう。

2. 分析の対象と方法

分析対象は、当時の東京の代表的新聞である『東京朝日新聞』、『東京日日新聞』、『読売新聞』（以下、『東朝』『東日』『読売』）とした。『東朝』は『大阪朝日新

聞]、『東日』は『大阪毎日新聞』とそれぞれ提携関係にあり、ロス大会で、両社は競い合うように、取材陣の派遣、速報体制の強化、ニュース映画や写真の収集・輸送を行った。オリンピックに際した臨時支出は、両社とも10万円を超過したという⁽⁹⁾。一方、『読売』は、東京を中心とした新興の新聞で、1924年の正力松太郎の社長就任後、ラジオ版の創設、夕刊発行などによって部数を拡大していたが、ロス大会報道への投資額は、数千円と『東朝』や『東日』には及ばなかった⁽¹⁰⁾。オリンピック取材の名目で日本からロスへと派遣した特派員数は、『日本新聞年鑑』によれば、『東朝』3名、『東日』4名に対し、『読売』は1名であった⁽¹¹⁾。そのため、『読売』は、電通や聯合の記事を多く掲載している。また、『東朝』と『東日』は、フォックス社及びパテー社と提携してニュース映画を撮影、競い合って日本へと輸送し、全国各地で公開したが、『読売』は、ニュース映画は作っていない⁽¹²⁾。

分析方法としては、量的・質的内容分析を行った。量的分析では、ロス大会の報道における、ナショナリズムの再生産に関する表象の傾向と特徴を数量的に把握することを主たる目的とし、3紙間の比較及びロス大会と前回アムステルダム大会の比較も試みた。

量的分析の対象期間は、大日本体育協会の選手団送別式の翌日から、選手団解散式の翌日とした。ロス大会は、1932年6月21日から同年9月9日、アムステルダム大会は、1928年6月18日から同年10月28日である。過去のオリンピックやオリンピック大会前後に開催される競技会についての記事も、文中にオリンピックへの言及がある場合に限って分析対象とし、社告も分析対象とした。なお、アムステルダム大会の報道の分析は、本稿ではロス大会の報道を分析するための補助とし、『東朝』のみを対象とした。

『東朝』及び『読売』は、データベースで、「開催地名(ロサンゼルス・アムステルダム)」か「オリンピック」をキーワードに含む記事を検索し、該当記事を抽出した。ただし、データベースで検索された記事でも、オリンピックとは無関係の記事については、除外した。『東日』については、マイクロフィルムを用い、筆者が手作業で該当記事を抽出した。

量的分析では、上記の手順で抽出されたオリンピック関連記事について、全体的な報道量を把握するため、記事面積、写真掲載枚数を調べ、分析対象期間中に、オリンピックに関して号外・別刷が発行された回数も調査した。続いて、オリンピック関連記事の見出しにおける特定の言語表現の登場回数をカウントした。特定の言語表現とは、(1)国名、(2)選手名、(3)日本を示す表現(「日章旗」「君が代」「わ

れわれ」など)、(4)戦争・平和・国際親善を連想させる言葉である。さらに、特定選手の個人的な人間関係(家族・恋人・恩師など)を主題とした記事、及び、外国人による日本選手の評価を主題とした記事を抽出し、その内容を詳しく量的に分析した。

量的分析とは別に、3つの事例に関して、ナショナリズムの再生産という観点から質的分析(言説分析)も行った。量的分析は、報道内容の全体的な傾向と特徴を体系的に示すのに適した手法であるが、仮説に基づくコーディング・カテゴリーに捉われ、メディア・テキストの意味の多層性を読み解くには適していない。しかし、オリンピックをマス・メディアに媒介された儀礼として捉えるならば⁽¹³⁾、その報道の分析において重要なのは、マス・メディアの報道によって、どのような規範や価値観、意識が国民の間で共有されるか、という点であろう。言説分析は、言語を通して社会の権力関係・構造が構築される、あるいは、社会の権力関係・構造の中で言語が使用されるという観点から、記事の見出し、レイアウト、前後関係、記事内で使用されている言語のレトリックや組み合わせ、図像の分析などを行う⁽¹⁴⁾。言説分析と量的分析を相互補完的に用いることで、分析結果の論証性を高めることができる⁽¹⁵⁾と考えた。

3. 量的内容分析の結果

3-1 全体的報道傾向

表1にあるように、紙面に占めるオリンピック報道面積の割合は3~4%(大会会期中は6~8%)程度、写真は約400~460枚、号外・別刷の発行回数は、『東

表1 報道の全体的傾向

	東朝	東日	読売	前回 (東朝)
紙面に占めるオリンピック報道の割合 (体育協会送別式から解散式期間)※	3.33%	3.23%	4.02%	0.91%
紙面に占めるオリンピック報道の割合 (開会式から閉会式期間)※	6.52%	6.32%	8.21%	5.11%
写真掲載枚数	398	458	417	80
号外・別刷発行回数	14	14	8	0

※号外・別刷は、紙面のサイズが異なることが多いため、含めなかった。

朝』と『東日』は14回、『読売』は8回であった。紙面に占めるオリンピック報道の割合はそれほど大きくはないが、写真の掲載枚数や号外・別刷の発行回数から、ロス大会は、当時の新聞にとって重要度の高いイベントであったといえる。前回大会については、比較的取材体制の整っていた『東朝』のみを調査したが⁽¹⁶⁾、大会会期中には報道量がやや増加していたものの(紙面全体の5.11%)、長期的な報道量は、ロス大会と比べると圧倒的に少なく(紙面全体の0.91%)、掲載された写真の数も5分の1、号外や別刷の発行もなかった。

新聞別にみると、『読売』が、報道面積の割合では他2紙を圧倒し、写真の枚数でも両紙の中間に位置していた。『読売』は取材・報道体制の面では劣勢に立たされていたが、全体的な報道量では、『東朝』『東日』と互角であったといえる。

3-2 国家の表象

(1) 見出しにおける国名

見出しにおける国名の登場回数は、『東朝』で日本114回、日本以外の国名102回、『東日』で日本89回、日本以外の国名121回、『読売』で日本139回、日本以外の国名137回であった。アムステルダム大会の報道(『東朝』)では、日

表2 各紙の見出しに2回以上登場した国名

東朝		東日		読売	
日本	114	日本	89	日本	139
米国	53	米国	62	米国	71
フィンランド	13	フィンランド	23	フィンランド	20
フランス	7	英国	8	英国	9
ドイツ	4	ドイツ	4	ドイツ	7
オーストリア	4	ハンガリー	4	インド	5
英国	3	フランス	4	フィリピン	5
インド	3	インド	3	オーストリア	5
フィリピン	2	支那	3	ハンガリー	3
ハンガリー	2	フィリピン	2	スイス	3
ブラジル	2			フランス	2
				オーストラリア	2
上記以外	9	上記以外	8	上記以外	5
計	216	計	210	計	276

本 53 回、日本以外の国名 75 回で、国名 (特に日本) が見出しに登場した回数は、前回大会から大幅に増加していた。

表 2 にあるように、日本に次いで多く登場したのは、3 紙で共通して米国である。米国は、国別優勝者数で他国を圧倒していたが、米国に次いで優勝者数の多かった国々 (イタリア・フランス・スウェーデン) が見出しに登場する回数は少なかった。米国の登場頻度が相対的に高かった理由としては、(1)大会開催地が米国であったこと、(2)新聞社が、ロス大会が日米関係に及ぼす影響を強く意識していたことが挙げられる。当時の外務省では、米国における排日機運の高まりを受けて、ロス大会が米国の対日世論に与える影響を注視していた⁽¹⁷⁾。こうした外務省の対外認識が、メディアの表象に反映されていたといえる。

(2) 見出しにおける「日本」を示す表現

表 3 は、「われわれ」「われら」「わが」、国旗・国歌の通称としての「日章旗・日の丸」「君が代」、祖国・故国・母国、在米日系人を示す言葉として「同胞」「邦人」といった言葉が見出しに登場する回数を調べた結果である。3 紙とも、見出しで、「われわれ」「日章旗・日の丸」「君が代」「祖国・故国・母国」「同胞」「邦人」を頻繁に用いている。

「日本」や「日本チーム」といった表現よりも、「わが国」「われらの代表」の方が、「われわれ」が一体であることを自明とする表現である⁽¹⁸⁾。国旗や国歌は、近代の日本においては、戦争や天皇の軍隊を連想させる国家のシンボルであったが、満州事変後一層その傾向が顕著となった。また、「同胞」や「邦人」といった言葉は、在米日系人を意味しており、これらの言葉が見出しで用いられていた

表 3 見出しでの「日本」を示す表現の登場回数

	東朝	東日	読売	前回 (東朝)
われわれ・われら・わが	65	82	115	22
日章旗・日の丸	22	27	21	5
君が代	7	4	9	2
祖国・故国・母国	6	17	10	1
同胞	4	2	16	0
邦人	6	10	10	2
計	110	142	181	32

ことは、日本という国民国家の周縁に生きる人々が、オリンピック報道において重要なシンボルとなっていたことを示している。日本という国民共同体が、「日本」という国名を直接用いることなく表現されることは、前回大会の報道では、極めて少なく、ロス大会報道の特徴であったといえる。前項の分析結果によれば、3紙の見出しに登場した国名のうち日本の占める割合は、48.7%とそれほど多くはない。だが、それは、ロス大会報道では、日本という国名を用いる必要のないくらい自国が話題の中心となっていたためであると考えられるだろう。

新聞別では、『読売』で、「われわれ」が多用されており、その数は、『東朝』の2倍近くであった。また、国名への言及頻度、「同胞」や「邦人」といった言葉が登場する頻度も高かった。『読売』の報道の特殊性については、後述する。

3-3 戦争／国際親善／平和の場としてのオリンピック

表4は、戦争／国際親善／平和を連想させる22の言葉について、見出しに登場した回数を調査した結果である。オリンピックは現在平和の祭典と広く認識されているが、ロス大会では、見出しには「平和」は一度も登場しなかった。国際親善を連想させる言葉（「使節」「国際親善」「国際愛」）も3紙で計6回の登場にとどまっていた少ない。

一方、軍隊や戦争を連想させる言葉は、3紙で計386回登場していた⁽¹⁹⁾。スポーツ報道における戦争のメタファーの使用は、現在では馴染み深いものであるし、全国中等学校野球大会の報道では、すでに1915年の第一回大会でみられた。しかし、表4にあるように、前回大会の報道では、見出しで戦争のメタファーが用いられることは、ほとんどなかった。オリンピック報道における軍隊や戦争を連想させる言葉の使用は、この時期においては新しく、特に「勇士」は、当時メディアが流行現象を作り出した「爆弾三勇士」のストーリーを人々に連想させたかもしれない⁽²¹⁾。

新聞別では、軍隊や戦争を連想させる言葉が見出しに登場した回数は、『読売』176回、『東日』113回、『東朝』97回で、特に『読売』が多かった。「軍」「敵」など、現代のスポーツ報道ではほとんど使われておらず、軍国主義の台頭する時代に特徴的であったと考えられる言葉は、『東日』にも比較的頻繁に登場している。総合すると、『東朝』よりも『読売』や『東日』で、オリンピックを戦争と重ね合わせた表現が目立っていた。

表4 見出しに登場した戦争／国際親善／平和を連想させる言葉

	東朝	東日	読売	前回(東朝)
戦	43	26	39	16
陣	22	21	36	1
軍	7	20	51	4
凱旋	21	18	25	0
敵	2	10	16	1
一騎討	1	3	2	0
勇士	0	1	2	0
武者	0	3	0	0
征途	0	0	3	0
粉碎	0	2	0	0
鎧袖一触	0	2	0	0
弩級	0	2	0	0
征服	0	1	1	0
出征	0	1	1	0
銃士	1	0	0	0
人間砲弾	0	1	0	0
屈服	0	1	0	0
征衣	0	1	0	0
戦争を連想させる言葉の計	97	113	176	22
使節	1	1	1	0
国際親善	1	0	1	0
国際愛	1	0	0	0
国際親善を連想させる言葉の計	3	1	2	0
平和	0	0	0	0

3-4 個人の表象・英雄の製造

(1) 見出しで取り上げられた選手

見出しに選手の個人名が登場した回数は、『東朝』296回、『東日』316回、『読売』422回で、見出しでは、国名よりも、選手名の方が、頻繁に取り上げられて

いた。前回大会の報道と比較しても、選手名の登場回数は、173回から大幅に増加している。マス・メディアは、個人に焦点を当て、特定の選手を英雄化していたといえる。

見出しに登場した選手の国籍に注目すると、日本人の占める割合は、『東朝』87.5%、『東日』81.3%、『読売』73.2%で、大多数が日本選手であるが、外国選手への言及も少なくなかった。これは、3-2(1)の分析結果(見出しに登場した国名のうち、約半数が、日本以外であった)とも一致した傾向である。

新聞別に比較をすると、外国選手の名前を見出しで多く取り上げていたのは、『読売』であった。また、『読売』で言及された選手の出身国は、他紙と比べると、バラエティに富んでいた。一方で、3-2(2)で述べたように、『読売』は、他紙より見出しで国名を取り上げる傾向や「日本」を示す表現を用いる傾向がみられた。これらは、取材速報体制で劣勢に立たされていた『読売』には、(1)個人間の争いを国家間の争いと重ね合わせて劇的に表象する傾向がみられ、(2)報道の劇化の過程で、外国選手との関係性で日本選手を描き出すという方法が採用されていた、といった特徴があったためであると考えられる。

見出しに頻繁に登場した選手名(表5)は、概ね、日本選手の競技成績を反映している。ただ、例外として、織田、ヌルミ、竹中の3名がおり、このうち、ヌルミと竹中の事例は、ロス大会の報道の関心が、日本選手の競技成績だけに向けられたのではないことを示している。

まず、ヌルミは、過去3回のオリンピック大会で9つの金メダルを獲得したフィンランドの陸上選手で、ロサンゼルス大会では、開幕直前に、職業選手であるとして出場資格を剥奪された。ヌルミが日本選手に混じって見出しに頻繁に登場していたことは、日本の新聞が、世界的な英雄による偉業の達成の可否にも注目していたことを示している。

一方、竹中の事例は、日本選手と外国選手の対抗関係を提示する

表5 見出しで取り上げられた選手名
(各紙上位10名)

東朝		東日		読売	
南部	24	南部	30	織田	20
織田	16	ヌルミ	18	ヌルミ	18
吉岡	16	吉岡	14	宮崎	18
宮崎	14	宮崎	12	南部	17
西田	11	前畑	10	吉岡	16
北村	8	大横田	9	西田	12
小池	8	西	9	大横田	9
西	8	西田	8	前畑	9
ヌルミ	8	織田	7	清川	8
竹中	7	清川	7	横山	8

際に、競技成績だけでなく、日本人の精神性が基準として採用されていたことを示唆する。やや記事内容に踏み込めば、竹中は、陸上 5000 m で、先頭から 1 周以上遅れながらも最後まで競技を中断しなかったこと、さらに途中で先頭選手に走路を譲ったことが、半ば反則ともとれる行為の末に優勝したフィンランド選手と比較して立派であると観衆や現地メディアに賞賛されたとして、特に『東朝』で 7 回と多く登場した。その見出しには、「最後迄奮闘の最小ランナー」「日本選手ファンの米人が竹中君絶賛」とある。⁽²²⁾竹中の精神性に焦点を当てた美談は、戦後肥大化していくが⁽²³⁾、その物語の原型は、この新聞報道にあったといえる。

(2) 選手の個人的な人間関係を主題とした記事

選手の個人的な人間関係をテーマとした記事（いわゆる、ヒューマン・ストーリーを語る記事）は、『東朝』21 件、『東日』29 件、『読売』18 件、計 68 件であった（表 6）。記事のほとんどが、日本選手を対象としており、外国選手の登場は、3 紙で計 6 回にとどまっていた。また、68 件中 33 件の記事（『東朝』『東日』では半数以上の記事）に、家族など、記事で取り上げられている人物の写真が掲載されていた。

表 6 選手の個人的な人間関係を主題とした記事の件数

	記事件数
東朝	21 (11)
東日	29 (17)
読売	18 (5)
計	68 (33)
前回（東朝）	0 (0)

※（ ）内は、家族や学校関係者等の写真を含む記事の件数

表 7 選手の個人的な人間関係を主題とした記事における登場人物

登場人物	登場回数
母	19
父	17
兄	15
妻	11
弟	10
学校関係者（先生以外）	9
妹	8
学校関係者（先生）	7
亡父、許婚者（女）、姉	各 6
恋人（女）	4
職場関係者	3
娘、息子、祖母、祖父、子供	各 2
養父、亡母、後見人、許婚者（男）、恩師、伯母、伯父、叔父、従姉妹	各 1

前回大会報道(『東朝』)では、選手の個人的な人間関係をテーマとした記事は0件であったが、ロス大会では、選手のヒューマン・ストーリーが視覚的イメージをも用いて語られていたことは、選手を単なる競技者としてだけでなく、一人の人間、あるいは国民として描く報道手法がとられていたことを示している。

表7にあるように、こうした選手のヒューマン・ストーリーに登場したのは、多くの場合、家族で、多い順番に、母、父、兄、妻である。許婚者や恋人も多く登場した。姉は、兄と比べると圧倒的に少ない。また、亡父も多く登場する。こうした記事では、特定の選手個人を媒介として、家族愛や家族に関する価値観(例えば、家父長制とそれを支える良妻賢母思想)が表象されていたと推測できる。社会的状況と関連づけるならば、特に母子関係の強調は、軍国美談の中に出征兵士の母性愛に関する物語が多く見られたことと共通している。⁽²⁴⁾

3-5 外国人による日本選手の評価を主題とした記事

外国人による日本選手の評価を主題とした記事は、『東朝』25件、『東日』23件、『読売』21件、計69件で、3紙でほとんど同じくらい取り上げられていた。66件が日本選手に対して明らかに肯定的な記事、2件がどちらかといえば肯定的な記事、1件が肯定か否定か判断が不可能な記事であった。前回大会の報道では、外国人による日本選手の評価を主題とした記事は7件しかなく、こうした記事の大幅な増加も、ロス大会の特徴である。

表8にあるように、日本選手を高く評価している主体と報じられていたのは、多くが米国人である。3-2(1)の分析結果(日本に次いで米国が最も多く見出しに登場した)とともに、メディアが対米世論の変化に敏感となっていたことを示している。これは、同大会が、満州事変を経て、対外宣伝の必要性が強く認識され始めた時期に開催されたことと無関係ではあるまい。また、選手やコーチだけでなく、メディア、有名人・専門家、市民・観衆などによる日本選手に対する評価が比較的多く登場していることも注目に値する。日本選手が多様な外国人から高く評価されていることを伝える報道は、日本人が

表8 「誰が」日本選手を評価するか

外国メディア	7
外国選手	15
外国コーチ	2
米国メディア	20
米国選手	12
米国コーチ	16
米国の有名人・専門家	6
米国市民・観衆	18
その他	12
不明	2
合計	108

日本選手を自画自賛する報道よりも、はるかに効果的に、日本人の優越性を読者に伝えた⁽²⁶⁾と考えられる。

評価の対象(何を評価しているのか)についてみると、日本チーム全体に対する評価を含んだ記事が48件、特定の日本選手に対する評価を含んだ記事が37件あった。これらの記事のうち、13の記事は、日本チームや特定の選手(あるいは、双方)の評価を、日本人一般の評価へとつなげており、日本選手だけではなく、日本人全体が高く評価されているというメッセージが発せられていた。

また、評価内容を、競技面、態度・精神面、その他に分類すると、多くの記事(50件)が競技面を評価していた。しかし、態度・精神面を評価する記事も28件あり、そのうち、競技面への言及はなく、態度・精神面だけに言及した記事も、13件あった。ここから、外国人による日本選手の評価を主題とした記事のなかには、競技自体の報道枠組みを超える記事も多く、競技面だけではなく、態度や精神性が賞賛的となっている、という物語が作り出されていたといえる。

以上、量的分析の結果についてみてきた。ロス大会の報道の全体的な特徴として、全体的な報道量の増加、「われわれ」や「日章旗」などの読者の国家への同一化を促すような表現の顕在化、戦争のメタファーの使用、選手の個人的な人間関係及び外国人による日本選手の評価を主題とした記事の大量出現が挙げられる。報道の中心は、日本や日本選手であるが、日本以外の国家や選手が取り上げられることも比較的多かったことが明らかになった。だが、一方で、特定選手の個人的な人間関係や外国人による日本選手の評価を主題とした記事の分析からは、外国選手は、あくまで日本選手を際立たせる存在で、ロス大会の報道で具象化されたのは、多くの場合、日本人選手とその家族であったことが示された。

4. 質的内容分析

本章では、オリンピック報道の主要場面に関する記事について、質的分析を行う。各事例を取り上げた理由は、以下の通りである。第1に、選手団と国家や国民の関係を考察するため、日本選手団の出発の報道を分析した。第2に、オリンピックの理念が象徴的に表象される式典として、開閉会式の報道を取り上げた。第3に、個人の表象とヒーローの製造過程に注目して、日本選手が初めて優勝した時の報道を分析した。

4-1 事例1 日本選手団出発の報道(『読売』1932年6月24日夕刊)

第1回目の日本選手団の出発は、『読売』では、夕刊1頁で、紙面の半分以上のスペースを使って報道された。見出しには、「行け!! 勝て!! スポーツ使節 燃ゆる世界制覇の血潮 我等の代表 鹿島発つ」[6.24.夕.1]⁽²⁷⁾とある。オリンピックの日本選手団が、日本国民である読者(「我等」)の代表であるということは、暗黙の了解事項となっている。そして、スポーツ使節には、勝つこと、世界制覇が期待されている。リード文には、選手団を指す言葉として、「第一次出発部隊」[6.24.夕.1]とあり、この記事では、日本選手団は、外交使節と軍隊という二重の役割をもつ存在として描かれていたといえる。

記事には、国家的シンボルの言語的・視覚的表象が、いくつか見られる。紙面左上には、選手団の東京駅出発時の写真が2枚掲載されているが(図1)、ともに、日本の国旗(選手団代表の持つ大きな国旗、各選手が着用する“恩賜”のブレザーに縫い付けられた国旗)を含んでいる。リード文では、「宮城を遥拝」「聖恩旗」[6.24.夕.1]などが太字になっており、紙面中央の囲み記事(岸体育協会長が出発前に参内したことを伝える記事)でも、「参内」[6.24.夕.1]が拡大されている。天皇は直接には登場しないが、天皇の神聖性・至高性が示されている。選手団は、天皇を頂点として団結する臣民の代表として描かれていたといえる。

注目すべきは、選手団とともに、選手団の見送りに駆け付けた人々が、この記事の重要な登場人物となっている点である。見出しには、「駅頭・埠頭『万歳』の怒涛」「無言の誓ひ! 光る涙 小スポーツマンからお守札」「迂り出る船に浴せる歓呼 横浜埠頭空前の人出」[以上6.24.夕.1]とあり、記事には、ビルの窓から顔を出す若い女性や選手にお守りを持参した小学生が登場する。一般国民の手で選手団の送迎が盛大に行われていることが強調されてい

萬歳の歡呼を浴びて

オリンピック選手団の出発
「上野駅東口下町のフオーム」



図1 『読売』1932.6.24.夕刊

るのである。さらに、掲載写真の1枚は、選手団の行進を見守る群衆をロングから捉え、写真を見る者に、群衆として参加しているように錯覚させる構図となっている。紙面全体として、読者も、日本国民として、ロスへと旅立つ選手団を応援する集団の一員としての役割を果たすべきであるというメッセージが発せられていたといえる。

4-2 事例2 開会式・閉会式の報道(『東朝』1932年8月13日号外、8月16日夕刊)

『東朝』では、開会式の第一報は、7月31日の号外で報じているが、『東日』との激しい輸送合戦の末、8月13日にも2頁からなる写真号外を2度発行した。ここでは、その開会式写真号外を分析する。なお、同日には、大会も終盤に差し掛かっており、水泳の男子種目で日本が連勝するという状況が生まれていた。

第1号外は、「オリンピック大会開幕の壮観」[8.13.号1.1]と題して、開会式時の競技場における写真6枚と、米国陸海軍の祝賀飛行の写真1枚を収録している。1頁の上半分に掲載された写真のキャプションには、「秩父宮殿下御下賜の日章旗を先頭に堂々入場する日本選手」[8.13.号1.1]とあり、2頁目にも、開会式の日章旗を大きく捉える写真と、敬礼する馬術選手(軍人)と笑顔を見せる女子選手の組み合わせの写真がある。⁽²⁸⁾日本選手と日章旗は、当然のことながら、開会式の写真報道の重要な被写体であったといえる。

ただ、開会式の写真号外には、外国人や外国選手も多く収録され、特に米国人の存在が強調されている。これは、量的分析によって示された報道の全般的傾向とも一致する。第1号外の1頁下段の写真は、開会宣言をした米国副大統領を捉えており、2頁にも、米国選手宣誓の写真、米国陸海軍の祝賀飛行の写真がある。第2号外では、掲載された開会式の写真8枚のうち、日本選手が映っているのは1枚だけで、他は、米国の有名人(映画俳優で、日本向けのラジオ放送に出演し、日本選手を褒め称える放送を行ったほか、大会終了後に来日した映画俳優ダグラス、女優フェイレイ、太平洋横断飛行のプトナム)、各国選手代表の宣誓式の光景、フィンランド選手・フランス選手・カナダ女子選手の入場シーンを捉えた写真などが掲載されている(図2)。号外全体で示されているのは、各国(西洋諸国)から選手が集う舞台としてのオリンピックである。そして、諸外国のなかでも特に米国への、文化面も含めた関心が高かったことがわかる。

開会式の写真とともに号外に収録されているのが、「大会の花、高飛込に鎌倉

嬢見事入賞欧米の花形と争ひ」
 [8.13号1.2]「羅府より快報来る
 百米背泳に全勝」[8.13号
 2.1]といった現地から1日遅れ
 で届いた日本選手団の競技成績
 に関するニュースである。これ
 らの記事は、外国人を多く捉え
 た開会式の写真と組み合わせら
 れることで、国際舞台において
 日本人が認められているという
 意味を帯びる⁽²⁹⁾。

一方、閉会式の記事は、夕刊
 1頁に掲載されたものの、8分
 の1ページほどの小さな扱いで、
 写真もなかった。「第十回オリ
 ムピック閉会 五輪の旗降さる
 六度聴く『君が代』 同胞

たゞ感激の涙」[8.16.夕.1]という見出しの後半部分は、閉会式に際して行われた水泳の表彰式の情景に基づいている。閉会式報道の全体的なテーマは、国際社会での日本の卓越性が認知されたことである。

同日のそれ以外のオリンピック記事でも、同じテーマが語られている。例えば、閉会式記事の左には、「水の強豪 世界一座談会(上) 勝因を語る我選手 敗因を述べる彼等」[8.16.夕.1]という見出しが掲げられている。この記事では、米国、ハンガリー、フランス、オーストラリア、カナダ、ドイツと日本の選手やコーチを朝日新聞社が招いて開催した座談会でのやり取りが、日本選手(我等)の勝利／外国選手(彼等)の敗北という枠組みでまとめられている。記事内に掲載された写真は、5枚全てが外国選手の顔写真で、日本選手の写真は存在しない。しかし、本文をみると、「日本人の作った記録を今後破るのは骨だ」「日本の勝利はやつぱりシステムチックなトレーニングのため」「日本のこの強い脚力を各国が会得しない限り日本は永久に王座を占めるでせう」[以上8.16.夕.1]など、日本選手の優越性を認める外国選手の発言が繰り返し登場している。日本人が日本選手を自画自賛するのではなく、外国人が日本選手を評価するという構図は、量的分析

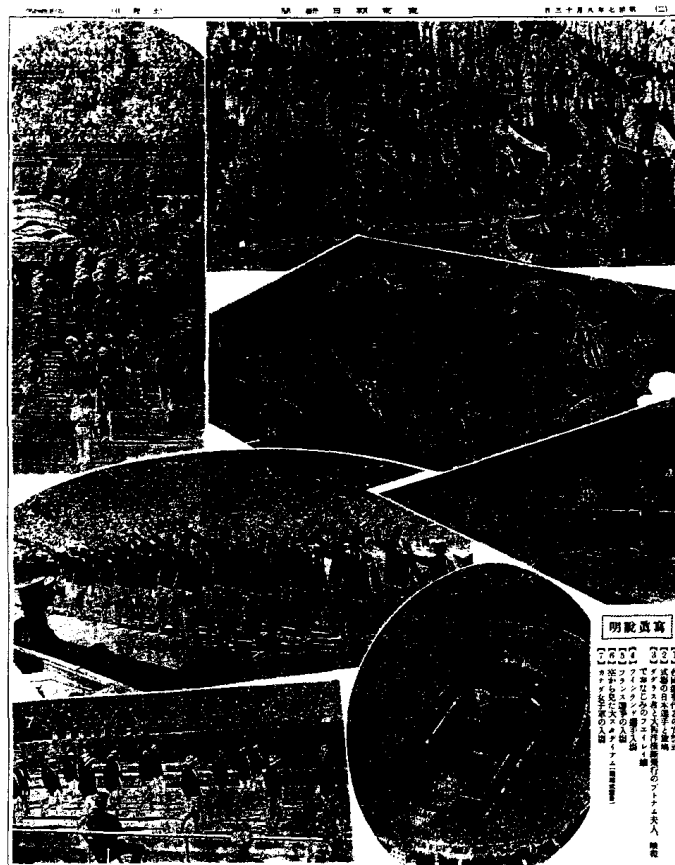


図2 「東朝」1932.8.13. 第2号外

でも顕著であったほか、次に取り上げる南部の優勝の報道にもみられる。

4-3 事例3 南部の優勝の報道（『東日』1932年8月6日夕刊）

ロス大会で日本選手として最初に優勝したのが、南部忠平であった。南部は、見出しで最も多く言及され（3紙で計71回）、特定選手の個人的な人間関係をテーマとした記事でも最も多く取り上げられていた（3紙で計7回）。『東日』では、南部の優勝のニュースを8月5日の号外にも収録しているが、ここでは、本紙の報道を分析する。

南部の優勝は、夕刊1頁でトップニュースとして報じられた。見出しには、「跳躍の霸王南部君」「大和魂の豪華版」「大日章旗揚がる中に 感激の『君が代』は轟く」[全て8.6夕.1]とあり、日本人が勝ったという意識が前面に押し出されている。とりわけ、「日章旗」の代わりに「大日章旗」、君が代が「演奏された」の代わりに「轟く」など、国家のシンボルの偉大さ・神聖さが誇張されているといえよう。リード文では、南部の打ち立てた「前人未踏の大記録」[8.6夕.1]が、観衆の歓声を浴び、外国人カメラマンが南部を追っている様子が描かれており、南部は、国際的な人気を獲得している世界の英雄である、とされていた。

一方で、2頁は、南部の優勝に沸く日本の様子を伝えている。そこでは、3枚の写真（ラジオを聴く群衆、南部の優勝を歓迎する文相、南部の許婚者）に象徴的に示されているように、ロスにいる南部選手と、日本にいる国民・選手の家族・国家の関係が描かれている。

まず、南部の感想をラジオで聴くために集まった人々の様子は、「街頭のラジオの前には時ならぬ人ばかり『えらいね』とそこ、に愉快的な国民的興奮と感激の街頭風景が見られた」[8.6夕.2]と描写されている。許婚者とその兄を取り上げた記事では、感傷的な表現が一層顕著で、「頬を流れる 感激の涙 許婚の横田久子さん」[8.6夕.2]という見出しが掲げられ、許婚者の兄がラジオ放送を聴いた感想として「日章旗がスル、とあがつた光景を思つて僕は泣いたよ 南部も感激にみちた声だつた」[8.6夕.2]とある。山口誠が論じるように、新聞がラジオ放送を参照するとき、「社会的同時性はより増幅され、より広範に循環していく」⁽³⁰⁾。加えて、ラジオ放送に耳を傾ける群衆と選手の家族の並列的な提示によって、選手の家族と国民が重ねあわされる。「国民」が選手の家族と同じように日本選手を注視することが当然視されるのである。ここにみられるのは、国家を家族の拡充と解釈する家族国家観であり、ロス報道は、家族内の情緒的結合が国民共同体

内のそれへと自然と拡張するような言説を含んでいたといえる⁽³¹⁾。

また、日本での興奮の様子は、オリンピックのニュースが、はるばる太平洋を渡って届けられることの不思議さ、そして「ここ」(日本)と「あちら」(ロス)をつなぐメディアの役割の重要性とセットで伝えられていた。ラジオ放送に関する記事の見出しには、「おゝ誇りの電波は 大洋を越えて」[8.6.夕.2]とある。また、かなり目立つ箇所に、毎日新聞社社長本山彦一と城戸元亮専務の祝電、南部の謝電が掲載されている。そこには、二大新聞社の一つである毎日新聞社が国民を代表して選手団に祝意を伝え、選手がその紙面を通じて国民への謝意を表明するという図式が存在する。ラジオや『東日』のような資金力のある新聞があるからこそ、ロス大会が国民的なイベントとして成立しえた。このことが、改めて紙面で表象・誇示されていたといえる。

5. おわりに

本稿では、『東朝』『東日』『読売』における1932年ロス大会の報道内容を、量的・質的に分析した。ロス大会の報道には、以下のようなナショナリズムの再生産に関する表象・言説が見られた。

第1に、国家的シンボルの強調や、国民共同体を所与のものとして認識させるような言語的・視角的表象である。紙面では、「日章旗」や「君が代」といったシンボルが、繰り返し登場し、日本選手団は、「我等の代表」「我選手」と表現された。国家としての日本を指す言葉として、国名を直接的に示す代わりに、「祖国・母国・故国」が用いられることも多く、「同胞」「邦人」といった在米日系人との国民的一体感を自明視する表現もみられた。

第2に、他者(外国人や外国選手)を差異化する言説である。量的分析結果によれば、外国人や外国選手も記事に比較的頻繁に登場し、世界的な選手の偉業達成の行方にも、関心は払われていた。ただ、これまでのナショナリズム研究によれば、自・他の区別に関する認識の形成は、ナショナリズムの成立・存続の基盤となっており⁽³²⁾、外国選手が多く紙面に登場することを、即、オリンピック報道における国際理解の促進と解釈することはできない。ロス大会報道では、外国人(特に、米国人)が日本選手を高く評価していることを伝える記事が頻繁に掲載されており、これらの記事では、日本選手の競技面だけではなく、日本人全体の態度や精神性への言及も多かった。また、事例2にあるように、「我々」(日本人)と「彼ら」(外

国人)を差異化する言説も存在していた。つまり、外国人や外国選手に関する報道は、日本と外国の対照性を明確にするために不可欠であったと考えられる。そして、オリンピックを、世界中から選手達が集う偉大な国際舞台と表象し、そのなかで、日本選手の優越性を照らし出したといえるだろう。

第3に、戦争のメタファーの使用である。ブリッグは、確立された国家におけるナショナリズムに関する議論で、戦争のメタファーが多く用いられるスポーツ報道は、読み手が、無意識的に(自ら好んで快樂を追求するなかで)、将来の戦争で必要となる精神性—国家のために犠牲となって戦う精神—を習得する場となっていることを指摘している。⁽³³⁾ロス大会では、国際親善や平和といった言葉に比べて、圧倒的に多くの戦争を類推させる表現が用いられていた。読者の意識に関しては本稿の範疇を超えるが、ブリッグの主張に従えば、読者は、ロス大会の報道を娯楽的に受容することで、無意識的に対外関係において個々人がもつべき身構え、特に国家のために献身的に戦う精神性を習得していったと推測できる。

第4に、国内を中心とした社会的諸関係の具象化である。紙面では、選手のヒューマン・ストーリーが語られ、見送り人や街頭でラジオを聴く人々、大臣などが、日本選手の動向を見守っている様子が報じられた。また、日本とロスの距離の遠さと、それを結ぶメディアの役割の重要性が強調された。マス・メディアを媒介として、国民が一緒に国際的なスポーツ・イベントを体験していることが具象的に表象されたことで、読者は日本という共同体の姿を想像し、そこへの帰属意識を確認したと推測できる。

ロス大会では、大衆化したメディアによって報道されたこと(表象の共有)自体が、国民的な規模でのオリンピック経験を作り出し、ナショナリズムの再生産という側面をもっていた。そして以上述べてきたように、報道内容においても、ナショナリズムの再生産に関わる表象が大幅に増加していたといえる。それは、1928年アムステルダム大会の報道では、顕著には観察されなかったことである。

しかし、ロス大会でみられた国家的シンボルの強調、他者の差異化、戦争のメタファーの使用、社会的諸関係の具象化といったナショナリズムの再生産に関する表象・言説には、一定の幅があったことを指摘したい。これらの表象・言説の集合体は、いわば、二つの中心をもつ楕円形のような構造をしていた。一方の中心には、外国人や外国選手に関する表象が多くみられたことに代表されるように、読者が、国際社会における「日本」を意識することによって、日本人としての一体感を感じるような表象・言説があった。だが、もう一方の中心には、天皇の存

在、日章旗や君が代を強く意識した愛国主義的な表象・言説が存在していた。この二つの中心が緩やかに共存していたのが、1932年ロス大会におけるナショナリズムの再生産に関するメディア表象であった。

やや敷衍していえば、後者の側面は、満州事変・上海事変の熱狂的な愛国主義的メディア表象と連続性をもち、あるいは1936年ベルリン・オリンピックのメディア表象にもつながっていく。前者の側面は、その後沈潜していくが、戦後のオリンピックや国際的なスポーツ・イベントの表象とも通底しているともいえる。しかし、ロス大会では、二つの側面が決して互いに排斥的、対立的なものとしてあったわけではなかった。このことは、1932年当時の日本の国際認識、あるいは現在の国際スポーツ・イベントのナショナリズムに関する表象を考えるうえで、重要であろう。

注

- (1) 阿部潔 (2001) 「スポーツ・イベントと『ナショナルなもの』—長野オリンピック開会式における「日本らしさ」の表象」『関西学院大学社会学部紀要』通巻90号, Keys, B. J. (2006) *Globalizing Sport: National Rivalry and International Community in the 1930s*, Harvard University Press, 向田久美子・坂元章・高木栄作・村田光二 (2008) 「オリンピック報道は外国人・日本人イメージにどのような影響を与えてきたか—シドニー・オリンピックを中心に」『人間文化創成科学論叢』第10巻, 上瀬由美子 (2007) 「オリンピックにおける外国関連報道—テレビニュースに現れるライバル・フレーム」萩原滋編著『テレビニュースの世界像』勁草書房, 坂上康博・高岡裕之 (2009) 『幻の東京オリンピックとその時代』青弓社, 浜田幸絵 (2010) 「戦前日本のオリンピック—コミュニケーションの政治経済学的視点から」『コミュニケーション科学』32号, など。
- (2) スポーツの大衆化や新聞社によるスポーツ・イベントの開催については、高津勝 (1994) 『日本近代スポーツ史の底流』創文企画, 坂上康博 (1998) 『権力装置としてのスポーツ』講談社, 井上俊・西山哲郎 (1996) 「スポーツとメディア・イベント」津金澤聰廣編『近代日本のメディア・イベント』同文館, に詳しい。
- (3) 山口誠 (2008) 「メディアが創る時間—新聞と放送の参照関係と時間意識に関するメディア史的考察」『マス・コミュニケーション研究』第73号, 竹山昭子 (2002) 『ラジオの時代』世界思想社, 黒田勇 (1999) 『ラジオ体操の誕生』青弓社
- (4) 浜田幸絵 (2010) 前掲論文
- (5) 吉見俊哉 (1998) 「幻の東京オリンピックをめぐる」津金澤聰廣・有山輝雄編『戦時期日本のメディア・イベント』世界思想社
- (6) 津田正太郎 (2007) 「ナショナリズムの生成および再生産過程におけるマス・メディアの役割—ナショナリズム概念の再検討による新たな視座の探求」『マス・コミュニケーション研究』第70号, 吉野耕作 (1997) 『文化ナショナリズムの社会学』

名古屋大学出版会

- (7) 江口圭一 (1975)『日本帝国主義史論』青木書店, 有山輝雄 (2001)「戦時体制と国民化」『年報 日本現代史』第7号
- (8) Keys, B. J. (2006) *op. cit.*, Iriye, A. (2002=2006) *Global Community*, University of California Press. (篠原初枝訳『グローバル・コミュニティ』早稲田大学出版部 15-50)
- (9) 新聞研究所 (1932)『日本新聞年鑑』[日本図書センター 復刻版(第11巻)] 31
- (10) 新聞研究所 (1932) 前掲書 31
- (11) 資料(新聞各社社史, 業界誌等)によって特派員数の記述は若干異なる。ここでは, 新聞研究所 (1932) 前掲書を参照した。
- (12) 新聞研究所 (1932) 前掲書
- (13) Dayan, D. and Katz, E. (1992=1996) *Media Events*, Harvard University Press. (浅見克彦訳『メディア・イベント』青弓社)
- (14) Fairclough, N. (1995) *Media Discourse*, Arnold. Deacon, D. et al. (2007) *Researching Communications*, 2nd edn., Arnold.
- (15) 量的分析と質的分析の組合せに関する議論は, Deacon, D. et al. (2007) *Ibid.*, 138-140 を参照。
- (16) 朝日新聞社史によれば, アムステルダム大会では, 特派員を1名派遣, ヨーロッパ駐在の社員2名が協力した[朝日新聞百年史編集委員会 (1991)『朝日新聞社史 昭和戦前編』朝日新聞社]。これは, 毎日新聞社と並んで当時の日本では突出して充実した取材体制であった。
- (17) 「『オリンピック』大会本邦選手ニ関スル新聞社説ニ関スル件」(昭和7年7月22日), 佐藤領事発内田外務大臣宛電報(昭和7年8月15日), 「『オリンピック』大会ニ於ケル日本ニ関スル新聞論調報告ノ件」(昭和7年9月13日)など。[国際「オリンピック」競技大会一件第二卷第十回(羅府), 外務省外交史料館所蔵]
- (18) Billig, M. (1995) *Banal Nationalism*, Sage, 114-125
- (19) 「軍」の使用例としては, 日本軍, 第一軍, 水上軍, 米軍, 常勝軍, 進軍など, 「敵」の使用例としては, 強敵, 無敵, 好敵手, 敵状視察などがあつた。「陣」は, 第一陣, 陣容, 水泳陣などと使われている。また, 「戦」は, 戦評, 戦績, 第一戦, 奮戦, スポーツ戦線, 戦友, 戦国, 善戦, 苦戦, 激戦, 敗戦, 力戦, 開戦などである。「勇士」と「銃士」は, 二勇士, 三勇士, 三銃士として使われた。
- (20) 有山輝雄 (1997)『甲子園野球と日本人』吉川弘文館 98-99
- (21) 有山輝雄 (2001) 前掲書
- (22) 『東朝』1932年8月7日夕刊1頁, 『東朝』1932年9月2日夕刊2頁
- (23) 竹中の美談は, 教材にも取り上げられていた[鈴木良徳 (1954)「オリンピックの話」『中学の国語(総合)二上』愛育社 49-52, 日本教図編集部編『オリンピックの精神』日本教図 8-9, 『読売』1962年3月4日夕刊5頁]。
- (24) 川村邦光 (2007)『聖戦のイコノグラフィ—天皇と兵士・戦死者の図像・表象』青弓社 102-103
- (25) 該当記事の抽出には, 記事の見出しを用いた。

- (26) これと類似したナショナリズムの様式として、例えば、ビリッグは、イギリス王室の分析の中で、差異の強調と同化を回避する主張に加えて、世界中の羨望の的になっているという優越性が、ナショナリズムを下支えしていると論じている。[Billig, M. (1992=1994) *Talking of the Royal Family*, Routledge. (野下一起・浅見克彦訳『イギリス王室の社会学』社会評論社 34-68)]
- (27) 以下、質的に分析した記事からの引用箇所には、本文中に、(1)日付、(2)朝夕刊・第1号外・第2号外の区別(朝・夕・号1・号2などと記す)、(3)掲載面を記載した。
- (28) 女子選手と馬術選手(軍人)は、日本選手団のいわば顔としての役割を担わされていたと考えられる。なお本稿では、紙幅の関係上、ジェンダーの表象に関する分析は行わなかった。
- (29) こうした技法は、現代のオリンピック報道にも顕著である。上瀬由美子(2007)前掲書は、アテネ・トリノ大会のテレビニュースで、外国(外国選手)の素晴らしさを語ることで、日本選手の価値をより高めるという手法が用いられていることを指摘している。
- (30) 山口誠(2008)前掲論文 17
- (31) 伊藤幹治(1982)『家族国家観の人類学』ミネルヴァ書房
- (32) 吉野耕作(1997)前掲書
- (33) Billig, M. (1995) *op. cit.*, 122-125